

## 死生観をめぐる問題

——受容とあきらめ——

大 町 公

はじめに

昨年の七月二二日、近畿地方でも久しぶりに部分日食が見られるというので、新聞やテレビでは、日食を観察するにはどうすればいいかという話題がよく取り上げられた。太陽を決して肉眼で見えてはいけない。失明の恐れがある。今は、「日食グラス」というものがあるようだが、われわれが小学生の頃は、すりガラスにろうそくで煤をつけ、それを通して日食を見たことを思い出した。おそらく昭和三年のことだったろう。

残念ながら、昨年、当日はあいにくの曇り空で、まあこれなら大丈夫だろうと思って、直接肉眼で見ようとしたが、太陽を見られたのはほんの一瞬だった。曇り空でも、太陽を見ること

はできない。そのとき、筆者はラ・ロシュフコーの箴言「太陽も死もじっと見つめることはできない」(Le soleil ni la mort ne se peuvent regarder fixement.)<sup>1)</sup>をあらためて、名言だと感じ入った。

太陽と同様、死もまた、何らかのグラスなしにはじっと見つめることはできない。そのグラスないしフィルターにあたるものこそ、筆者は「死生観」ではないかと思っている。<sup>1)</sup>

### 一 「死生観」について

死に対する感じ方はさまざまである。それにより当然死生観も異なってくる。死は恐くないという人もいる。自分は死なないと思っている人もけっこういるようで、放射線科医中川恵一

は「死なないつもり日本人」にメッセージを送り続けている。どうせ死ぬのだから、考えても意味がないという人もいる。筆者は還暦を過ぎた今も死は恐ろしい。特定の宗教を信じてはいないが、「死ねば無になる」、「死はすべての終わり」とはどうしても考えたくないという立場でいる。

筆者はこれまで、死生観について、岸本英夫、上田三四二をはじめとする人たちから学んできた。

一九五四年、当時五一歳だった東京大学教授（宗教学）岸本英夫はからずもアメリカ合衆国で、皮膚癌（メラノーマ）との告知を受け、最悪の場合、あと半年の命であると告げられた。幸い、手術を繰り返して、一〇年間生き延びることができた。告知を受けた頃のことには脳裏を離れないであろう。絶筆「わが生死観」の中で、癌患者が既成の「死生観」に期待するのは、「何か、この直接的なげしい死の脅威の攻勢に対して、抵抗するための力になるようなものがありはしないか」ということである。それに役立たないような考え方や観念の組み立ては、すべて、無用の長物である」（岸本、一九七三）と言い切った。筆者も、死生観は何よりも死の恐怖をやらわらげるものでなくてはならないと思う。

一九六六年、医者にして歌人上田は四二歳で結腸癌を患い、いったん生をあきらめた。幸い、その癌は癒えたものの、還暦を迎えた頃、今度は前立腺癌を患うことになる。岸本も上田も、信仰を持たず、来世を信じていなかった。上田は最晩年、講演

の中で、「死んだらなくなると思っています。そのなくなる自分をどうすれば納得できるか」（上田、一九九三）という問いの答えを見つげようと、宗教の力を借りずに、思索を続けてきたと語る。

もう一人は広井良典である。広井は、日本人の死生観は、高度経済成長期より「空洞化」し始め、今では「死生観そのものがほとんど『空洞化』している」（広井、二〇〇一）と言ったが、二〇一〇年の夏発覚した高齢者の所在不明、遺体放置事件など、またその前にも、いわゆる「直葬」なるものが増加していたことなどを考え合わせると、今、死生観がどのような状態かについて、単に「空洞化」という表現でいいのか、しばし迷うところである。

拙論では、日本人の死生観のいわば骨組みは「あきらめ」ではないか。今後、死生観が回復されるとすれば、その「あきらめ」の可能性にかかってくるのではないかということ述べてみたい。

## 二 柏木哲夫「死の受容」

日本のホスピス界の第一人者、尊敬する医師柏木哲夫の著書を取り上げたい。柏木は三年前、ホスピス医としてのこれまでの活動を、『定本ホスピス・緩和ケア』にまとめた。それによると、淀川キリスト教病院のホスピス病棟は日本で二番目、一

九八四年にスタートした。柏木はホスピス長として、開設後一年、その実践を振り返る。「死の受容」に関して、まず、精神科医キューブラー・ロスの有名な「死にゆく患者がたどる五段階」説に触れる。ロスは、患者たちは、①否認、②怒り、③取引、④抑うつ、⑤受容 (acceptance) というように、「死の受容」に向かって、五つのプロセスをたどると考えた。

日本人の場合、末期患者の「心理プロセス」は、ロスの考えたそれとは異なる。当時、日本では、まだ癌告知が普及していなかったので、患者は当然「治るかもしれない」という希望をもつ。他方、病状が進むと、「悪い病気ではないか?」と、「疑念」がわき、「不安」を募らせる。こうした「疑念」や「不安」について、尋ねる人は約二〇パーセント。尋ねた人は、医師や家族から、的確な答えが得られず、「いらだち」を覚え、その結果「うつ状態」に陥る。残りの八〇パーセントは「いらだち」を経ずに「うつ状態」になる。そうして、大半の患者は、最期には、死を受容するか、あきらめの境地にたどりつく。

わずかだが、他の死にもある。最期まで闘い続けながら死を迎える「闘いの死」や、自分は死ぬはずがないと、死を否定したまま逝く「否定の死」である。そのうち、安らかなのは「受容の死」、「かなり平静に死を受け入れて亡くなった場合」である。

ロスは「受容とは感情がほとんど欠落した状態である。あたかも痛みが消え、苦闘が終わり、ある患者の言葉を借りれば

『長い旅路の前の最後の休息』のときが訪れたかのように感じられる」、「患者はある程度の期待をもって、最期の時が近づくとを静観するようになる」(ロス、一九九八)と言っている。

柏木は最初の一年間に、ホスピスで亡くなった患者を、自分を含む医師二人と看護師長と看護師の計四人で、死亡時の態度から、①「受容の死」②「あきらめの死」③「闘いの死」④「否定の死」⑤「その他、長期の意識障害や急変などのため判断できなかった場合」に分類した。<sup>(3)</sup> 淀川キリスト教病院のような所でも、「受容の死」より「あきらめの死」の方が多い。そして、次のように付け加える。

「自分の死を受け入れて亡くなった患者さんの死への心理プロセスには、人生の積極性を感じました。また、われわれケアに当たった者とその患者さんとの間に温かさ、人間的な連続性、つながりを感じました。一方、あきらめて亡くなった方は人生に消極的な感じで、言い過ぎかもしれませんが、少し冷たい感じで、コミュニケーションがどこかでブツツと切れたような非連続的な結末になったようでした。」

受容には心が澄むような気がするのに対して、「あきらめ」は濁りのような、もう少しやれたことがあったのではないかという気持ちが残りました。

以前には、「あきらめとは、絶望的な放棄と言えます」とか

「とりつくしまがないといった感じ」(柏木、一九八〇)という表現もあった。クリスチャンのホスピス医柏木には、できれば「受容の死」がふえてもらいたいという願いがあつたらうと思う。こうして、〈あきらめと受容〉は、その後も柏木の一貫した最重要テーマの一つとなつていった。

### 三 受容とあきらめ

ここで、「あきらめ」の意味をはっきりさせておこう。「あきらめ」には、どこか敗北の臭いがつきまとうし、投げやりな感じがしないこともない。ところで、この「あきらめ」という語には、やや複雑な変遷がある。

小学館『日本国語大辞典 第二版』「明める」の「語誌」によると、もとは「事情を明らかにする」という意味だった。「この意は文語的表現の中で現代まで続き」、また「口頭語の世界では、近世になると」……と、あきらむ』の形をとって心にはっきり決める、迷いを断ち切るという意を表わすようになり、さらに目的語を明示しない形で『断念する』ことをいう現代の『諦(あきら)める』につながっていく」とある。「あきらめる」には、「断念する」、「仕方がないと思ひ切る」という意味のほかに、「事情を明らかにする」、「迷いを断ち切る」といった積極的なニュアンスも入ってきているのである。われわれは、特に意識せず、普段さういう使い方をしている。

それについては、別のところで、柏木も触れている。「あきらめる」は、語源的に「明らかに見る」であつて、元來客観的判断を意味していた。そういう意味で使われていけば、受容とあきらめ、両者は近いだろう。しかし、現在のあきらめの使われ方は、それとは違つて、「やや消極的な意味が含まれています」(柏木、一九九七)。そういうことから、両者の間に「大きな差」があると言っているようだ。

では、どうすれば「受容の死」が可能となるのか? 柏木にも、これこれの条件が満たされれば可能、といったような明確な答えはないようだ。ただ、先のように、医師、看護師が見れば、誰の死が「受容の死」であつたかは判断できるということだろう。ここでは、信仰が重要な鍵を握ると言えそうだ。柏木は、いわゆる「信仰心」や「宗教心」を持った者でも、「受容の死」は可能であると言っているが(柏木、一九八四)、「受容の死」とは、まずもつて〈信仰により死を受け容れた上での死〉と言つていいと思う。

次に、「あきらめ」と「受容」の関係である。柏木も、「受容」と「あきらめ」とのへだたりに関して、考えは揺れ動いてきた。両者の関係は、そう単純なものではなさそうだ。

では、これはどう考えればいいのか。闘病記「輝け我が命の日々よ」の著者、精神科医の西川喜作は前立腺癌を患い、二年七カ月の闘病のあと亡くなったが、闘病二年目の秋、対談「ガン患者の心理」の中で、ロスの「五段階」説に異論を述べ

たあと、自分の現状をこう表現している。西川は死についての学、「死学」をいち早く計画し、そのために、可能な限り、告知後の自分を観察し、今後に役立ててもらおうとした。そういう姿勢から出た貴重な発言である。

「ちようと海岸に打ち寄せる波が寄せては返すように、ショックがわーっと押し寄せてきたり、それが引いて、覚悟をしなければいかんと思ったり、そういうことが何回も繰り返す。何といまするか、非常に激しい苦行をしながら自分を創り、経験し（やがて）まあ死も仕方がないということになって受容していくのではないのでしょうか。私は、まだそこまで行きませんけれど」（柳田、一九九〇）。

つまり、西川は今後、「非常に激しい苦行」を経て、「覚悟」し、徐々に「仕方がない」との思い、つまり「あきらめ」が進行していけば、死を「受容」できるのではないかと予想している。「受容」を目指し、「あきらめ」を深めていく。西川は特定の信仰をもたなかったが、死を「受容」したとき、そこに新たな展開があるのではないかと期待しているようだ。筆者は、「受容」と「あきらめ」の関係について、西川のこの説明にはかなり説得力があると思う。

#### 四 戸塚洋二の死生観

日本人は、死が避けられないとき、自分がそういう状況に陥ったことを、「あきらめ」ようとするのではないか。われわれにはそういう構えが身についているのではないか。西川もそうだった。

最近の闘病記の中で、注目すべきものに、著名な物理学者戸塚洋二『がんと闘った科学者の記録』がある。これは、戸塚が二〇〇〇年、五八歳のときに大腸癌の手術をし、その後徐々に他の臓器に癌が転移、八年後に亡くなるが、最後の一カ月にブログとして綴ったものである。死の直後、『文藝春秋』（二〇〇八年九月号）に「あと三カ月 死への準備日記」というタイトルで、その一部が紹介された。その後、立花隆が編集したものである。戸塚自身出版を意図して書いたものではない。「人生（2008年2月10日）」から引用する。

「われわれは日常の生活を送る際、自分の人生に限りがある、などということを考えることはめつたにありません。稀にですが、布団の中に入って眠りに就く前、突如、

▼自分の命が消滅した後でも世界は何事もなく進んでいく、

▼自分が存在したことは、この時間とともに進む世界で

何の痕跡も残さずに消えていく、

▼自分が消滅した後の世界を垣間見ることが絶対に出てこない、

ということに気づき、慄然とすることがあります。

個体の死が恐ろしいのは、生物学的な生存本能があるからである、といくら割り切っても、死が恐ろしいことに変わりはありません。

お前の命は、誤差は大きいが平均値をとると後1・5年くらいか、と言われたとき、最初はそんなもんかとあまり実感が湧きません。しかし、布団の中に入って眠りに就く前、突如その恐ろしさが身にしみてきて、思わず起き上がることがあります。右に挙げたことが大きな理由です。

死ぬとは、「突如、……とということに気づき、慄然とする」、

「突如その恐ろしさが身にしみてきて、思わず起き上がるのがあ」と言う。ここで戸塚は裸眼で死を見ている。死と戸塚の間に何の仕切りもないのである。両者を隔っていた薄い膜のような「死生観」が破れ、死の恐怖がドッと押し寄せる。それは常に「突如」として襲ってくる。新たなフィルターとしての「死生観」が急ぎ必要とされるのはこういうところだろう。「太陽も死もじっと見つめることはできない」のである。戸塚は、

続けて、

「何とか死の恐れを克服する、いつてみれば諦めの境地はないのだろうか。そのような境地を無論見つけてはいませんが、右の理由を超越する諦めの考えが一つ二つ思い浮かぶことはあります。」

▼幸い子どもたちが立派に成長した。親からもらった遺伝子の一部を次の世代に引き継ぐことが出来た。『時間とともに進む世界でほんの少したが痕跡を残して消える』ことになるが、種の保存にささやかな貢献をすることが出来た。

▼もっとニヒルになることもある。私にとって、早い死といつても、健常者と比べて10年から20年の違いではないか。みなと一緒だ、恐れるほどのことはない。

▼さらにニヒルに。宇宙や万物は、何もないところから生成し、そして、いずれは消滅・死を迎える。遠い未来の話だが、『自分の命が消滅した後でも世界は何事もなく進んでいく』が、決してそれが永遠に続くことはない。いずれは万物も死に絶えるのだから、恐れることはない。

と書き、「後の二つはちょっと情けない考えですが、一蓮托生の哲学によって気が休まります」とコメントしている。

戸塚はおそらく誰から教わることなく、「あきらめ」でもって、死に立ち向かい、死の恐怖を「克服」しようとした。信仰というフィルターを持たなければ、あきらめ、諦観に頼るしかない。残念ながら、戸塚は以後、この問題をこれ以上深く追究することはなかったように思う。

## 五 加藤周一と相良亨の『日本人の死生観』

加藤周一は『日本人の死生観』終章で、「近代日本人の死に対する態度の特徴」として五つを挙げ、その五番目に、「一般に日本人の死に対する態度は、感情的には『宇宙』の秩序の、知的には自然の秩序の、あきらめをもつての受け入れということになる。その背景は、死と日常生活上との断絶、すなわち、死の残酷で劇的な非日常性を、強調しなかった文化である。」と述べている。

さて、「あきらめをもつての受け入れ」、先の西川の発言とともに、これをヒントに考えてみると、筆者は、柏木の言う「受容の死」には、「信仰をもつての受け入れ」とともに、「あきらめをもつての受け入れ」も入るのではないかと思う。となると、基本的に、「あきらめの死」とは、意識していると否とにかかわらず、「あきらめをもつて受け入れ」ようとして、そこまで到達できなかった死ということになる。

相良亨にも加藤と同名の著書があるが、その「まえがき」で、

このようなタイトルにした理由を述べている。

「初老の私には、死生観への関心は個人的な問題としてそろそろ本格的になりつつある。われわれの祖先たちがどのようにして死んでいったかということは、私にとって慕わしいものとなりつつある。彼らの死の受けとめ方に近くことによって、私も静かに死を受けとめることができるかもしれないという期待ももちうる」。

ちなみに、相良はこの時六三歳だった。その年齢に近づいた筆者も、同様のことを感じる。「われわれの祖先たち」なら、われわれにも受け入れやすい死の迎え方を教えてくれるかもしれない、と。

相良は、加藤の書を、「日本人の死生観の基本線はほぼこの両書（もう一つは磯部忠正『無常』の構造―幽かの世界―注大町）に素描されているといつてよからう。」との高い評価を与えている。相良も、『日本人の死生観』において、「あきらめ」に強い関心を持ち、『あきらめ』の思想の一つの原型ともいえるべき「本居宣長の死生観を考察する」。

死は悲しいもの、悲しむよりほかないものである。宣長の言い方では、「せんすべなき」ことであった。「せんすべなし」とすることは「あきらめる」ことである。相良は『あきらめ』とは不本意のこしつとも、なすすべなく、それを受容し、それにしたがう意識である。受容する限りについて、そこには不

本意をのこしたままの「一種の心の安定がある」と言う。「あきらめ」は「一種の心の安定」をもたらず、と。先に、『日本国語大辞典』で確かめた「あきらめ」の意味、「心にはつきり決める、迷いを断ち切る」からいって、そういうことは言えるだろうと、筆者も思う。

では、悲しむことと「一種の心の安定」との関係はどうなのか。宣長の「安心(あんじん)」、つまり「死に対する平静な心のもち方」は、悲しみの克服によるのではない。むしろ、悲しむところに安心がある。宣長は、よいこともわるいこともすべて神々の所為(しわざ)と理解した。人が悲しむのも神の所為である。そして、相良はこう言う。

「宣長においては……悲しみは否定されていない。したがって悲しむ自己は否定されることなく、しかも悲しむことが神々への随順であり、そこに安心があるという。宣長において悲しいのは死であるが、死は神々の所為であるから、神の所為が悲しみとして受けとめられるのであり、神の所為を悲しみとして受けとめ悲しむことが神々への随順であり安心につながるというのである」。

相良は「一般の日本人は、死の悲しみを克服することなく、また悲しみのうちに狂うことなく悲しみつつ死んでいったのはなかるるか」と言う。死は「神々の所為」であり、悲しいことだが、そのままに、悲しむことは「神々への随順」となり、

「安心」につながる。宣長の「あきらめ」であるが、これは、多くの日本人の心を、宣長が思想化したというのが、相良の考えである。「多くの日本人が死を前にして発狂しないのは、この『あきらめ』をもつためであろう」と。

筆者は二〇数年前、岸本英夫から、「死の問題をつきつめて考えていって、それが『この、今、意識している自分』が消滅することを意味するのだと気がついた時に、人間は、愕然とする。これは恐ろしい。何よりも恐ろしいことである。身の毛がよだつほどおそろしい」(岸本、一九七三)という言葉を聞き、驚愕すると同時に、岸本に強い親近感を覚えたが、今回、相良から「発狂」という激しい言葉を聞いて、同様の思いがした。では、死を「あきらめをもって受け入れる」とはどのようなことなのか、その一例をあげてみたい。相良は七五歳の時、次のような心境を吐露している。

「筆者の人生が一つ一つ次第に終って行くという感覚は、必ずしも悪いものではない。あれこれが終って行く時の流れを感じながら、なにか静かにそれを見送り見守っている自分がいるようにも思われる。終りを静かに見送り、うけとめるのはあきらめの進行といえようか。あきらめが静かに深まるのは筆者の願うところである」(相良、二〇〇六)。

平成八年、亡くなる四年前の文章である。あきらめが次第に深くなくていく自分を静かに見ている、そういう自分を眺めて

いる自分がいる。相良は、『日本人の心』の中で、「もはや『あきらめ』とはいえないような、『あきらめ』を突き抜けた『あきらめ』ともいべき心の姿勢」（相良、一九八四）について触れている。謡曲『姨捨』を引き、この「あきらめ」には、「センチメンタリズムはまったくない」とか「凄絶と形容してよいような『あきらめ』」である、と言う。相良のあきらめも、そうであるのかどうか、断定するのは躊躇するところだが、あきらめが深まると、死が近づきつつある自分を、なんの感情もなく見る、といった内容の表現はほかでも出会ったことがある。竹内整一は『「かなしみ」の哲学』の中で、正岡子規が最晩年、そういう「あきらめ方」にたどりついたことを指摘している。「自分自身をもひとつの風物のように眺め見る…見方」である。その結果、子規は「主観の方は恐ろしい、苦しい、悲しい、瞬時も堪えられぬような厭な感じであるが、客観の方はそれよりもよほど冷淡に自己の死という事を見るので、多少は悲しい果敢ない感もあるが、ある時はむしろ滑稽に落ちて独りほほえむような事もある。」と書いている。これが「あきらめをもっての受け入れ」とするならば、至難とは言わないまでも、かなり難しい。

おわりにに——「ゆだねる」ということ——

翻って考えてみると、果たして「受容」それ自体が到達すべ

き目標なのかどうか、である。筆者は、受容を目指す、その方向性は正しいと思う。西川の言葉を借りれば、「受容」に向かつて誰もが「非常に激しい苦行を」をする必要があるか、あるいはできるのかということである。大事なことは、安らかに死ぬことであり、「受容」へと向かうそのプロセスで、自分を「ゆだねられる」ものに出会えるかどうかではないかと思う。

柏木は、肝臓癌で亡くなった、園芸や造園の仕事をしていた三八歳の男性Nさんについて、「この患者さんは特定の信仰は持っていませんでしたが、いわゆる信仰心とか宗教心とか言われるものは持っていたように思います」。職業柄、「植物の営みの中に人の力ではどうにもならない超自然的な力を感じておられたのかもしれない。……人がどれほど努力しても、それを超える大きな自然の力があることをNさんは肌で感じながら生きてきたのだと思います」（柏木、一九八四）と言う。この患者の死も安らかだった。「宗教心」とは、加藤の言葉で言うところ「宇宙感情」になるが、加藤も、受け容れるものは、死それ自体ではなく、「宇宙の秩序」、「自然の秩序」と言った。そういうものに、自分をゆだねられるかどうかであると思う。「受容」することよりも、「ゆだねる」、「ゆだねられる」ことの方がずっと重要ではないかと思うのである。

柏木は、「人の寿命は人の力ではどうにもならないものであり、神様にゆだねるしかないのだ」ということをNさんは自身自身にも、また周りの人々にも言い聞かせながら亡くなりました

た。」と書いた。今、筆者も、そういう所に一縷の望みをつないでいる。

## 注

(1) 吉本隆明は自刃した村上二郎への「哀辞」の中で、「死ねば死にきりである。」(吉本、一九七九)と、高村光太郎の詩の一節を引いた。そのことでよく知られることになったが、高村は「夏書十題」で、八番目に「死ねば」と題して、「死ねば死にきり。／自然は水際立つてゐる。」と書いたのである。非常にシンプルではあるが、これも一つの「死生観」であり、死を裸眼で見ているわけではない。

(2) 岸本と上田については、それぞれ二度、大学の「紀要」で論じたことがある。「岸本英夫のたたかい」、「歌人上田三四二」『たまものとしての四十年代』、「死は『別れるとき』——岸本英夫の生死観」、「三四二晩年の死生観」である。前の二つは拙著『私の「死への準備教育」』に、あとの二つは拙著『命の終わり——死と向き合う七つの視点』に再録した。また、筆者の「死の恐怖」については、前者の「あとがき」で素描した。

(3) この分類は、優れて内面にもとづくものであると思う。遠藤周作によれば、作家の椎名麟三は「私がプロテスタントの洗礼を受けて、いちばんよかったのは、これで死ぬ時に、『苦しい』とか『死にたくない』とか、醜く叫びながら死んでいく覚悟ができた」ことだと言ったそうだ。筆者は、椎名がそのとおり、「苦しい」とか『死にたくない』とか、醜く

叫びながら「死んだとしても、それは「受容の死」であり、「安らかな死」に分類されると思う。

(4) 加藤は少し前で、この「宇宙」について、「この場合の『調和的宇宙』は、物理的自然ばかりでなく、すべての生物を含み、死者の魂(日本語のカミ)さえも包摂する。観察者自身がそのなかに含まれるから、この宇宙は明瞭な認識の対象にはなりえず、したがって知識としてよりは、自分自身を包みこむ宇宙的な感情としてあたえられる。」と説明している。

(5) 引用に際して、東京大学大学院教授川本隆史氏から、相良久子編『相良亨の思い出』所収「若い、ふたたび」他のコピーをお送りいただいた。厚く御礼申し上げます。

(6) 吉本隆明『源実朝』によれば、実朝は晩年、と言っても二七年に満たない人生だが、次のような「詩の思想」に至った。たとえば、「秋ちかくなるしるしにや玉すだれ小簾の間とはし風の涼しさ」について、「風の涼しさ」で止められたこの歌の特徴を、吉本は『風の涼しさ』を感じている。じぶんを、なんの感情もなく、じぶんの「心」がまた「物」をみるように眺めているという位相である」と言う。こういう「じぶんという「事実」をながめているじぶんという位相」を、吉本は「事実」の思想」と呼んでいる。

## 参考文献

上田三四二、一九九三、『歌びとの悲願』春秋社。  
遠藤周作、一九八八、『私のイエス』祥伝社(祥伝社黄金文庫)。  
大町公、一九九七、『私の「死への準備教育」』法律文化社。

——、二〇〇七、『命の終わり——死と向き合う七つの視点』法  
律文化社。

柏木哲夫、一九八〇、『臨死患者ケアの理論と実際——死にゆく  
患者の看護』日本総研出版。

——、一九八四、『安らかな死を支える』いのちのことば社。

——、一九九七、『死を看取る医学——ホスピスの現場から』日  
本放送出版協会（NHKライブラリー）。

——、二〇〇六、『定本ホスピス・緩和ケア』青海社。

加藤周一／M・ライシュ／R・J・リフトン、一九七七、矢島翠

訳『日本人の死生観』岩波書店（岩波新書）。

岸本英夫、一九七三、『死を見つめる心——ガンとたたかった十年  
間』講談社（講談社文庫）。

キューブラー・ロス、エリザベス、一九九八、鈴木晶訳『死ぬ  
瞬間——死とその過程について』読売新聞社。

相良亨、一九八四a、『日本人の死生観』ベリかん社。

——、一九八四b、『日本人の心』東京大学出版会。

相良久子編、二〇〇六、『老い ふたたび』『相良亨の思い、出』。

高村光太郎、一九五七、『高村光太郎全集第二巻』筑摩書房。

竹内整一、二〇〇九、『かなしみ』の哲学』NHKブックス。

戸塚洋二、二〇〇九、『がんと闘った科学者の記録』文藝春秋。

中川恵一、二〇一〇、『死を忘れた日本人——どこに「死に支え」  
を求めるか』朝日出版社。

西川喜作、一九八二、『輝け我が命の日々よ——ガンを宣告され  
た精神科医の一〇〇〇日』新潮社。

日本国語大辞典第二版編集委員会、二〇〇〇—二〇〇二、『日本

国語大辞典 第二版』小学館。

広井良典、二〇〇一、『死生観を問いなおす』筑摩書房（ちくま  
新書）。

正岡子規、一九八五、『飯待つ間——正岡子規隨筆選』岩波書店  
（岩波文庫）。

柳田邦男、一九九〇、『死の医学』への序章』新潮社（新潮文  
庫）。

吉本隆明、一九七一、『源実朝』筑摩書房。

——、一九七九、『初源への言葉』青土社。

ラ・ロシュフォー、フランソワ、一九八九、二宮フサ訳『箴言  
集』岩波書店（岩波文庫）。

（おおまち いさお・奈良大学）